

聖書の正体『燐・han』IV

「イエスの実像」

2013・12・10

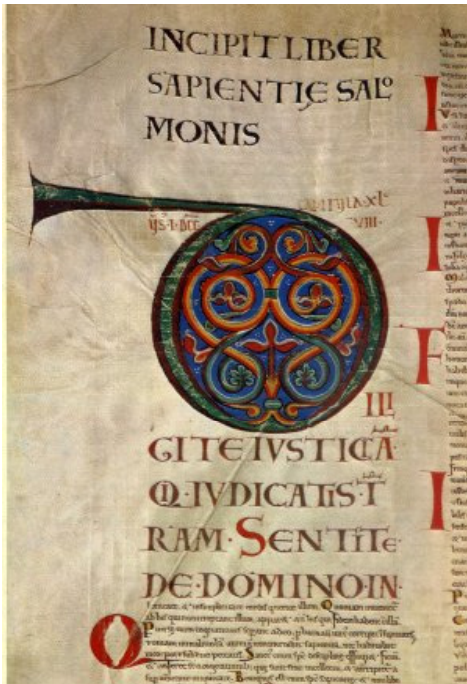
1. 世界中に「要保護者」(弱者)の人達が沢山いる。
2. この人達は臨床的に、例えばベーシックインカムとか生活保護で互助共済するとしても現状下では、とても救済しきれていない。
3. その「要保護者」(弱者)が発生する原因を突きとめて、それを除去しなければ、社会正義は実現できない。
4. 言うまでもなく社会正義を実現する機関が国家であり政治である。
5. だから社会正義が行われてない国家や政治がまかり通っているとき、社会不正義である「要保護者」(弱者)が増加する。
6. 「要保護者」(弱者)の増減が社会正義・不正義のバロメーターなのである。
7. その増減の最大の原因は私有財産制度に基づく個人主義・利己主義である。
8. 私有財産制度においては必然的に個人主義・利己主義にならざるを得ない。
9. 結局、全てのサイクルが「私有私腹」・「私利私欲」の競争社会(摩擦・軋轢)となるので、人のことなどかまっていられない。
10. 人のことは、例え親・兄弟といえども「利用価値」としての「客体」でしかなく、親子関係も「利用価値」が基準となる。
11. 親が子を生むとき、夫は妻を、妻は夫を「夫婦愛」という形で「受容」する。
12. 「夫婦愛」の元には、男女の恋愛や、男女のご縁があって、その男女は結ばれるのだが、その結婚が「政略結婚」であるとか「詐欺結婚」あるいは「擬似結婚」(親が決めた結婚とか、できちゃった結婚)等の場合は、相手の「利用価値」が根底にあるので、生まれた子供は「利用価値」の産物でしかなく、所謂「夫婦愛」という「愛の結晶」としての子ではないため、その子は必然的に「渴愛の子」として生まれ育つ運命を背負う。
13. イエス・キリスト教の根本は「犠牲愛」(燐愛)である。イエスの説いた「愛」は「犠牲愛」(燐愛)だからである。「イザヤ書」という呪いの書から生まれたイエスの「愛」は、所詮呪いなのだ。
14. 「政略結婚」「詐欺結婚」「擬似結婚」(親が決めた結婚とか、できちゃった結婚)等の場合は男女の両方か乃至は片方の者が、この「犠牲愛」(燐愛)の運命に晒されるので、そこに生まれた子はイエス・キリストのように「両親」(父ヨセフ、母マリア)に対して「無視」の態度をとる。父ヨセフに対しては 100%「無視」、母マリアに対しても一貫して「婦人よ!」として呼び捨てにし 100%「無視」の態度をとる。自分が「渴愛の子」(父不明・母不信)だったからである。
15. これは完全な「犠牲愛」(燐愛)＝「渴愛執着」の姿で、ユダヤ教の律法・その第五「父母を敬え」に反した「律法違反」の最たるものなのだ。
16. 私(新村)がイエス・キリスト教を「エセ宗教」として弾劾する第一の理由は、イエスの際立った「親不孝」である。
17. イエスは全くの「気の触れた精神病患者」である。
18. 子にとって親こそが「神」であり、親あつての「自分」なのだ。

19. 「自分」を産み育ててくれた親をないがしろにするような、イエスのどこに「**神性!**」があるというのか。
20. **イエス・キリスト教**という宗教は、人間秩序の根本(親子関係)からして間違っている。
21. イエスほど女の腐ったような女々しい男はいない。イエスが十字架で息を引き取る時、「主よ、主よ。なんで私を見捨てるのですか」と、呪いそのものの泣き言を言っている。
22. 当時の**ユダヤ教**の人達は**ヨセフ**が斯く言う通り、老若男女を問わず、極めて「殉教精神」が旺盛で、泣き言どころか、どんな拷問を受けても、平然且つ毅然として死んでいった。
23. そういう殉教の最中であって、「我こそは**メシア**なり、**神の子**なり」と意気がっていたイエスの死に様としては、何と無様な……最後の最後まで神に命乞いをしている有り様……**オウムの麻原**以下でしかない。
24. イエスが磔になった直接の原因は「神殿冒瀆」である。
25. どこの世界に「神殿」に対して「乱暴狼藉」を働くバカがいるのか!!
26. どこの世界だって「神殿」は敬虔な「神殿」なのだ。
27. 日本で言えば「神殿」は「神社仏閣」である。その「神殿」=「神社仏閣」の祭事の時に「気に食わない」という個人的私情で暴れ回り、露店をひっくり返す等、言語道断のキチガイ沙汰としか言いようのないことをしでかした。ヤクで狂ったポン中ですら、そんなイカレたことはしない。
28. 元々、**イエス・キリスト教**は**パウロ**が**ペトロ**と**マルコ**をたぶらかして、でっち上げた虚構の物語であり、**パウロ**自身の『**回心**』(律法オンリーの**パリサイ派**から、律法フリーの**パリサイ派**に転向)に拠るもので、「**ナザレのイエス**」なる風来坊などどこにも存在しない。
29. **パウロ**が**旧約聖書**の大預言書「**イザヤ書**」をネタ本にして、**クムラン宗団**・**エッセネ派**の「**義の教師**」=「エゼキアス、ユダ親子」をモデルとし、その**エッセネ派**から独立開教した「**洗礼者ヨハネ**」のキリスト教をパクリ、**パウロ**の『**回心**』(律法オンリーの**パリサイ派**から、律法フリーの**パリサイ派**に転向)物語にしたのである。
30. 本物のキリストとは「**洗礼者ヨハネ**」のことである。このことについては別掲「**義の教師**」と「**イエスの実像**」をご照覧下さい。
31. 要するに**パウロ**というペテン師が、**ローマ帝国**に阿ねいてイカサマの「**愛**」=「**犠牲愛**」(燔愛)=「**渴愛執着**」(大煩悩・貪欲)を説いたために、その「**犠牲愛**」(燔愛)=「**渴愛執着**」(大煩悩・貪欲)が、その後、時の権力者(**コンスタンティヌス**)に受け入れられ、**律法**フリー・翻って**律法**無視が世界中にはびこってしまったのである。
32. イエスの「**両親無視**」という「**親不孝**」が、**パウロ**の『**回心**』(律法オンリーの**パリサイ派**から、**律法**フリーの**パリサイ派**に転向)動機で、今風に言えば「**親離れ**」ということなのだ。
33. 本当の「**愛**」というのはイエスの説く「**心貧しき者**」への「**神の国**」ではない。「**心貧しき者**」とは「**分別の余裕のない者**」という意味で、「**考える時間すらない**」**過重労働者**(**奴隷**・**奴隷予備軍**)をいうのであって、この人達への「**愛**」は「**安息日**」の順守しかないのである。
34. 今、私達現代人は日曜日や祭日を「**休日**」にしている。これは**旧約聖書**の創設者

- モーセが、「十戒」を定めてくれた「安息日」(土曜日)という律法のお陰である。
35. この「安息日」という律法をイエスは屁理屈を言って無視し破った。
 36. パウロ=「虚像のイエス」は、それまでの律法オンリー・パリサイ派を、律法フリー・パリサイ派に変えていったのだ。
 37. イエスが本当のメシア(救い主・キリスト)ならコンスタンティヌスがキリスト教をローマの国教にした時、ユダヤ人は一律に救われた筈である。
 38. ユダヤ人・ユダヤ教(律法オンリー・パリサイ派)は、むしろ反対に迫害された。架空のイエスを殺したといふとんでもない嘘八百の濡れ衣を着せられてである。
 39. 歴史的事実は、タキトゥスがその著「年代記」で斯く言うように「しかし元首の慈悲深い援助も惜しめない施与も、神々に捧げた贖罪の儀式も、不名誉な噂を枯らせることはできなかった。民衆は「ネロが大火を命じた」と信じて疑わなかった。そこでネロは、この風評をもみけそうとして、身代わりの被告をこしらえ、これに大変手のこんだ罰を加える。それは、日頃から忌わしい行為で世人から恨み憎まれ、『クリストゥス信奉者』と呼ばれていた者たちである。この一派の呼び名の起因となったクリストゥスなる者は、ティベリウスの治世下に、元首属吏ポンティウス・ピラトゥスによって処刑されていた。その当座は、この有害きわまりない迷信も、一時鎮まっていたのだが、最近になってふたたび、この過悪の発生地ユダヤにおいてのみならず、世界中からおぞましい破廉恥なものがことごとく流れ込んでもてはやされるこの都においてすら、猩獗をきわめていたのである」としか記録されていないのだ。
 40. それはピラトに処刑された「洗礼者ヨハネ」のことであって、「ナザレのイエス」などという、気の触れた風来坊のことではない。
 41. タキトゥスがいう「キリスト信奉者」とは「洗礼者ヨハネ」より、洗礼を受けた数多の「メシア信奉者」=「キリスト信奉者」のことである。
 42. 遠藤周作が「イエスの生涯」を書いたのと同じく、パウロが福音書の絵図を書いたのだ。
 43. 「心貧しき者」の意味すらわからない物書きが得意満面となってイエスの生涯を書いているが、所詮は貧乏を知らない世間知らずの絵空事で、イエスの説いた「愛」を、「犠牲愛」(燔愛)=「渴愛執着」(大煩悩・貪欲)と理解できず、「右の頬のみならず左の頬」まで、権力者の嗜虐趣味の餌食(人の不幸は蜜の味)にしてしまった。
 44. 畢竟、正当な「労働対価」の100倍~100万倍超の『不労所得』を貪る貪欲な格差社会の帝王や貴族達は、紛れも無いイエスが説いた「犠牲愛」(燔愛)=「渴愛執着」(大煩悩・貪欲)の申し子であって、この構図は、「モーセがつき、イザヤがこねし神の餅、座りしままに食うはイエス」なのだ。貪者(どんじゃ・痴れ者)にとってイエスは正に「神」なのである。
 45. 「愛」とは慈悲であり温かい敬意なのだ。左の頬を差し出して嗜虐者(痴れ者)の満足(人の不幸は蜜の味)に与することではない。因みに、「憎」とは冷たい他意(敵意)である。
 46. とどまるところを知らない『不労所得』増大の元凶こそ、イエスの説いた「犠牲愛」(燔愛)=「渴愛執着」(大煩悩・貪欲)にあることを、全人類は、とくと知るべきである。

中世期最大のギガス写本

(別名 悪魔の聖書)



要するに右の悪魔の絵を挿入することによって聖書が「悪魔の聖書」であることを証したのである。



中に掲載されている悪魔の絵。悪魔に魂を売った僧侶がこの写本を作ったという伝説がある。

付録

1. 渴愛。
2. 「死海文書の謎」マイケル・ベイジェント／リチャード・リー 共著 高尾利数 訳 第12章『使徒言行録』、第16章『パウロ＝ローマのスパイあるいは密告者？』。
3. 「イエス・キリスト」の正体。

痴れ者・イエスは言う

「人間は食うために生きているのではない」と！

戯言を言うのではない。

「人間は食い食わせるために生きているのだ！」

母が乳呑み児に乳を与えるように。

根絶

六大差別

宗教・人種・文明・制度・職業・貧富

日本義塾 主宰 新村絃宇二

渴愛

とくに破壊欲に関して

文責：[舟橋左斗子](#)

Q：渴愛とは何でしょうか。

A：生命には渴愛があります。渴愛があるから、終わりなく生きていくのです。死んでもそこで終わらないというのは、仏教の考え方です。

渴愛というのは、文字通りに渴いている状態。欲しがる状態。トゥルシュナーというのはパーリ語、サンスクリット語で、日常の渴く状態にも使っているし、何かをすごく欲しがる時にも、トゥルシュナー、タンハーといいます。それが日本語で「渴愛」となっているんですね。

生命は皆、いつでもこの「欲しがる状態」でいるのです。我々のところの中ではいつも、この「欲しい」「欲しい」という欲しがるエネルギーがあって、それは消えないのです。あれもやりたい、これもやりたい、あれを聞きたい、これを聞きたい、あれを見たい、これも見たいと、いつでもその欲しがるエネルギーが働いているのです。人間ばかりでなく、どんな生命でも、欲しいものを得よう、得ようとしてしまうのです。欲しいものを得たら、もう探求するのをやめた方がいいでしょう？ それをやめられないのです。それは不思議な働きなのです。欲しいものを得たら次にはまた違うものが欲しくなる。さらにまた違うものを欲しくなる。この、欲しがる感覚、気持ちは消えません。

たとえば寒いなら暖房をつける。そうすると暖かくなる。暖かい空気が欲しいと思って、暖房をつけたら暖かい空気が入ってきて、その「欲しい」という渴愛は消えるのです。でも、それでは終わらないでしょう？ 次には違うものを欲しがってしまうのです。暖かくなったところで、それでは煎餅でも食べてお茶でも飲もうと、次のものを欲しがってしまうのです。そして、煎餅を食べてお茶を飲んだところで終わるのかと思えば、そうじゃないでしょう。時間も経ったし疲れてきたから、寝ようと。あるいはお風呂に入ろうということになる。そうやって次から次へと欲しがるものは生まれてきます。

それだから探すことには終わりがなく、生命の苦しみには終わりが無い。そして死ぬときにも、もっと生きていたいという、欲しがる気持ちで死んでしまう。そうなると、死んでもそのエネルギーは消えない、ということで輪廻するだろうということが推測できるのです。現在の我々の生き方を見ていると我々はぜんぜんストップしませんね。考えるということもそのひとつです。ひとつ考えると、考えたくて考えたくて、考えるのです。考えたいことを考えて、終わったらやめればいいのに、ここは止まりません。考えて終わったら、それから次、というふうになってしまうのです。

読みたい本を読む。しかし、読んでいる途中で、これが終わったら他の本を読みたいなあという気持ちがすでに生まれているのです。そんなふうに、我々の活動は止まりません。活動を続けることで、生きていくということになります。死ぬときも同じ気持ちだから、そこで活動は止まらないだろうと。いつでも何か欲しがって、欲しがって、そこで生きている、その欲しがる気持ちを渴愛といいます。

Q：もう少し具体的に教えてください。

A：欲しがる気持ちといっても、顕微鏡で見ると3種類の欲しがる気持ちがあって、それら3本の糸が組み合わさって1本のひもが編み上がっている、3本の糸が1本に巻いているような感じの気持ちなのです。

1本目は、ものを欲しがる気持ち。煎餅を食べたい、テレビを見たい。音楽を聴きたい、服を着たい、暖房をつけたいと。からだに触れるものを欲しがる気持ちです。からだに触れるものといえば、目に見えるもの、耳で聞こえるもの、舌や鼻で感じるもの、からだで

感じるもの、その5つですね。その欲しい気持ちに従って、食べたり買ったりしますが、おいしいものを食べれば、次には何を食べようと考え、CDを買って音楽を聴いても、今度はどんなCDを買おうかなと、ずーっと終わらないのです、ものを欲しがることは。

2つめの欲は、死にたくないという気持ち。生きていたいという気持ちなんですね。1番目のように、ものを欲しがるのは、生きるためなんですね。生きていても満足しませんね、だから今までも生きてきたのですけれど、まだ満足していない、もっと生きていたい。すごく存在欲があるのです。だから人間というのは、歳なんか聞かれると、あまり気分が良くないでしょう。若いときは元気に返事しますが、歳をとるに従って、何か聞かない方がいいことのようになってきます。まだまだ満足していないから、まだまだがんばりたいからね。

そして、問題の3番目です。3本目の糸は「破壊欲」です。ここまで理解できれば、破壊欲も理解できるでしょう。生きていたいという気持ちがあれば、生きること自体がものすごい競争ですし、欲しいものがすべて手にはいるわけではありませんから、欲しいものというのはすごく苦勞して競争して、戦って得なくてははいけないのです。

この3本の糸が1本に編み上がったものを渴愛といいます。

ですから、存在というのは、私たちの希望とは反対の方向へ動いているのです。私たちは生きていきたいのだけれど、置かれている環境を、我々は壊そうとしているのです。我々は自分のからだをすごく好きで大切なんです、じーっと置いて動かさないでおくとからだはどうなりますか？ 壊れていって、死んでしまうのです。ということは、からだ自体も我々を殺そうとしているのです。

ですから、がんばってがんばって、苦勞して、競争して、戦うのです。水を飲み、ご飯を食べ、運動し、服を着て、暖房をつけ、本を読み……。我々の頭だって、どんどん暗くなって落ち込んでいっちゃったら、からだは壊れていってしまいます。ですから、頭をいつでも楽しく、明るい状態に、動いている状態にしておかないと。だからみんな、芸術に触れたり、見たり聞いたりふざけたり遊んだりしている。そういうふうにならなければ、死んでしまうのです。

Q：破壊欲についてもう少し教えてください。

A：私たちは生きていたい、そしてものを欲しがるのですが、生命は破壊欲もなければ生きていけないのです。我々は、自分のプラスにならないものを破壊していくのです。そしていつしか自分の置かれている環境を壊そうとするのです。壊したい気持ちも欲なのです。ですから、私たちの生き方というのは、あるものを育て、あるものを壊す。

たとえば私たちは、害虫なんかは殺してやろうと思っているじゃないですか。ウィルスや細菌を殺してやろうと思っているでしょう。そのように、いろいろなところで、いやなものを壊そうとして行動している。戦争も、結局は同じ欲求の延長線上にあります。会社に行っても、自分の邪魔をしようとする連中には、すごく怒りを感じ、何とか邪魔しようという気持ちが生まれてくるのです。その人を放っておけば自分がダメージを受ける。女性が嫁に行ったら、姑がいろいろなことを言って行動を規制する。そこで、この人はいやだと怒りが生まれ、当然ながら破壊欲が生まれてくるのです。

我々は誰でも、悪い条件を壊して、良い条件を揃えるということで生きています。じゃがいも1個を持ってきても、洗って、悪くなっているところを包丁で取って、皮をむいて、それからゆでたりして食べますからね。じゃがいも1個を見ても、食べたいからと、そのままばくっと食べるわけにはいきません。どこか一部を壊さなければならぬのです。ここにもやはり3本の糸がからみあっています。じゃがいもが欲しいという1番目の欲、これを食べて元気になりたいという2番目の欲、そして洗ってきれいにしてゆでて食べましょうという、3番目の破壊欲、そうやって渴愛は3本セットで動いているのです。

Q：3つめの破壊欲について、もっと具体的に教えてください。

A：たとえば、勉強しようと思います。いい大学に入りたいとがんばっても、うまくいかない場合がありますね。希望の大学には入れなかった、ということがあるでしょう。世界の環境が私のために動いているならば、私が東大に入りたいと言えば「はい、どうぞどうぞ」ということになるでしょうが、実際には東大は何を言うかということ「入るな」と、扉を閉めてくるのです。そこで、東大と戦わなくてはならないのです。そこではまた、たくさんの人々が同じく戦うのですから、やはり勝つのは決められた人数だけなのです。「相手に勝とう」と、破壊欲で行動して、そこで負けると、負けごとに破壊欲が強くなってしまふのです。

身近な例で見ると、夏の夜、蚊が入ってきて、手で追い出そうとがんばってもなかなか出ていかない。何とか、その一匹を殺してやると追いかけ回す。それでなかなか捕まえないと、どんどん怒りが募って来るんですね。負ければ負けるほど、強烈に破壊欲が膨張するのです。増えて増えて、強くなっていくのです。

このような状態がつづく、普通の世界では、人々は自殺するのです。もう自分には戦えないと。やっていた悪いこと、賄賂を取っていたことや誰かをいじめていたことがばれたりすると自殺する。なぜならば自分に敵が現れたのです。自殺するということは、この「破壊欲」という渴愛が、ものすごく強くなっちゃったということなのです。あまりにも強い怒りで自殺するのです。わずかでも戦う余地があれば、がんばるのです。わずかでも戦って、自分の欲しいものが得られるということがわかればがんばりますが、勝てないなあと思ったら、自殺してしまうんですね。

また人間は、慈悲がなければ、自分のためになるなら人も殺すのです。1人でなく、何人でも殺すのです。テロリストは、爆弾を飛行機に取りつけて、とにかくたくさん殺せばよいのだと。自分の目的のためには、大量殺人したほうがよい。そう思えば、原子爆弾でも落とす。今は平和な社会ですから、原子爆弾なんて過去の話かと思えば、そんなことはありません。今も作っているのですから。しかも、5つの国しか作ってはいけないうんて、信じられないほど汚い考え方です。我々に、平等や民主主義を教える連中が、爆弾を持つ権利があるのは私たちだけよ、あなたがたは持つべきではないと言うのです。そういうものを絶対使わないと決めてしまえば、何兆円単位のお金が無駄にならなくて済むのです。そのくらい莫大なお金を投入しているのは、必要であれば使いますよ、ということなのです。

第二次世界大戦で、ヒットラーが自分にとって必要ということで、大量に殺人を犯しました。現代でも、国の幹部が、自分の権力を保ちたい、ただそれだけのために、何十万もの人を殺しています。それも破壊欲です。そういう人は、失敗すると自殺してしまいます。だから、それだけの人を殺しても、生きていられる、権力を保てるという見込みがあってやっているのです。ですから人というのは恐ろしい。ずっと国を治める権力を保てたいと思う権力者、世界を支配したいと思ったヒットラー、そのくらい大きなものを欲しがったのです。私たちはせいぜい、もっとおいしいご飯を食べたいとか、その程度のものを欲しがっているのです。怒りは小さいのです。ただ、量の問題なのです。欲の量が増えくると、破壊欲もその分、バランスをとって増えていくんですね。だから欲が減れば、その分当然、破壊欲も減っていく。欲がきれいに消えてしまえば、あの恐ろしい破壊欲も、きれいさっぱり消えてしまふ。そのような関係なのです。

Q：自分を殺す破壊欲と他人を殺す破壊欲、正反対に見えますね。

A：自殺は、戦いに負けた人の場合。戦いで、どう考えても勝てる見込みがないから自殺する。受験にがんばってきた子が、母親からは「勉強しなさい、東大に入りなさい」といじめられてきて、それでもやっぱり戦いには負けた。そうすると、母親に合わせる顔がない、友だちに合わせる顔がない、両親が自分に引いたレール、たとえば東大を出て、いい会社に入って、出世して……そんなレールからはずれてしまった、すべて壊れてしまった、も

う生きていられない、と自殺に向かう。大量殺人は、大きな欲を満たすために、とことん戦う人の場合です。

Q：破壊欲は、いつごろから大きくなっていくのですか。

A：破壊欲、殺しあう気持ちというのは、子供のときからあります。ある母親のもとに2人目の子が生まれるでしょう。そこに殺し合いの原則が生まれますし、そこから競争も生まれるのです。ですから、2人目の子が生まれる前に、大きくなっている上の子に、一生懸命手をかけ、いろいろなことを教えてあげて、わざわざ愛情をかけておいてあげないと危険なのです。そうでないと、上の子が、知らないうちに赤ちゃんの首を絞める可能性があります。母親は、そういうことは本能的にわかっていますから、先に、もうひとりやって来るんだよ、ということを知ってあげます。そこでちょっと、ごまかしもするんですね。「良かったねえ、これからあなたはお兄ちゃんになるんだよ。弟かなあ、妹かなあ」。本人は、何が良かったのかさっぱりわからないのですが、良かったと言われるのだから、何か良いことがあるのだろうと錯覚するのです。今まで自分のことだけにかまっていた母親が、自分のことをまったく無視している。それでも強引に、何か良かったのだろうと思って、なんとかまあまあ生きています。

Q：兄弟が助け合うような感情はないのですか。

A：助け合い、慈悲というのは、わざわざ強引に、無理矢理育てないと現れないものなのです。ですから、世の中を哲学的に見ると、あまりにも恐ろしいのです。母親さえ、自分の邪魔になるというなら、子を殺すのです。母親に得がないと子供は育ちません。子供を産んで、自分の立場が良くなったとか、これから子育てを楽しむぞ〜とか、自分にとってプラスのものが生まれてくると育てるのであって、マイナスが生まれてくると壊すという働きは、確実にあるのです。

Q：破壊欲、渴愛の原因は何ですか。

A：仏教には無明という概念があります。無明があるから渴愛が生まれると考えます。逆に言えば、ものごとをきちんと観られるようになれば、もう渴愛は消えてしまうのだということです。渴愛が完全に消えてしまえば、もう輪廻転生もない。

しかし、仏教では、人間は本来恐ろしさのかたまりだといいいながら、やさしくしなさい、人を助けなさいといひます。そして、欲を減らしなさいと、中道を語るのです。他の哲学では、人間は恐ろしいのだから自分を捨てなさいとか、自分を破壊しなさいとかいう場合もあるようですが、仏教でいうのは自分を捨てろということではなく、欲を捨てなさいということなんですね。無明と渴愛を客観的に観ることで消してみましようというのが、お釈迦さまの教えなんですね。皆さんからの質問を、スマナサーラ長老にお聞きしました。

以上。舟橋左斗子

「執着」について

仏教の教えは「四苦八苦」からの解脱(解放)で、そんなに難しい教えではありません。

つまり「四苦八苦」の原因が「渴愛執着」にあるので「渴愛執着」は「やめましょう!」と言っているだけなのです。「渴愛」については上記の通りわかりやすく説かれていますので「執着」について一言付記します。

「執着」というのは、徳川家康公が「過ぎたるは猶及ばざるが如し」と遺訓した、その過ぎたる部分の「過ぎた渴愛」という意味で、「中毒症」「依存症」「確信症候群」のたぐいであり、昂じれば「妄想狂(精神病)」になってしまう危険をはらんだ、囚われの状態(自分を見失った状態)のことです。「渴愛」に囚われてしまうと、それは「貪欲・貪婪(大煩惱)」に陥ってしまうので、何事につけ「過剰な執心」はしないようにしましょうということです。 2013・12・10 聖 四門

死海文書の謎

マイケル・ベイジェント／リチャード・リー 共著
高尾利数 訳

第12章『使徒言行録』

福音書自身を別にすれば、新約聖書のうちで最も重要な文書は、『使徒言行録』である。事実、歴史学者にとっては、『使徒言行録』はさらに重要な意義を持つものでさえある。党派性の強い出所をもつすべての歴史的な文書と同様、それはもちろん、懐疑的に、注意深く取り扱わなければならない。われわれはまた、このテキストが誰のために書かれたものなのか、誰の役に立ったのか、そしてどういう目的のために書かれたのかについて知らなければならない。だが、今日まで、「初期キリスト教」の最初の年月についての明らかに決定的な報告をしてきたものは、福音書ではなく、『使徒言行録』であった。確かに『使徒言行録』は、他には簡単に見出されることのない多くの基本的情報を含んでいるように思われる。その点だけでも、それは諸展開の可能性を含んだテキストである。

一般に認識されていることであるが、福音書は、歴史的な文書としては信頼できない。諸福音書のうち最初のものである『マルコによる福音書』は、紀元後六六年の反乱以前に編纂されたものではなく、おそらくそれよりも若干後代のものであろう。四福音書はすべて、それらが編纂された時よりもずっと以前の時代を呼び起こそうとしている。それらはごく簡単に歴史的背景を略述し、本質的には大いに神話的なイエスの姿と彼の教えに焦点を当てている。それらはつまるところ詩的なものであり、宗教的な文書であって、年代記であろうとさえしていない。

『使徒言行録』は、非常に違った性質の文書である。もちろんそれは、絶対的に歴史的なものだとは受け取れない。第一にそれは非常に偏見に満ちている。このテキストの著者であるルカは、明らかに多くの違った資料に依拠しており、それらの資料を、自分自身の目的に合わせるように編纂し書き直している。教義的叙述であれ文学的スタイルであれ、統一しようという試みはほとんどなされていない。教会史家でさえ、『使徒言行録』の年代記述が混乱していること、著者が述べている事件の多くについて何も直接の経験を持っていない、諸事件に自分自身の秩序を押し付けようとしていることを認めている。そういうわけで、或る別々の事件が一つの事件のなかに混入されていたり、一つの事件であったものが、別々の事件であるかのように書かれている。そのような問題は、パウロの登場に先立つ諸事件に関するテキストの部分において時に尖鋭に見られる。さらに『使徒言行録』は、福音書と同様、選択的に編纂されたものであり、後の編集者たちによって大いに手を加えられているのである。

それにもかかわらず『使徒言行録』は、福音書とは違って、連続した、そして長い期間にわたる一種の年代記であろうとしている。福音書とは違って、それは、一つの歴史的記録を保持しようとしており、少なくとも一定の箇所においては、叙述する出来事についての直接の、あるいは間接の経験に基づいて書かれたものである。偏見はあるが、その偏見はごく個人的なもので、このことによって現代の注釈家は、ある程度まで、行間を読むことができるのである。

『使徒言行録』において語られる物語は、十字架刑の直後から始まり——一般的には紀元後三〇年とされるが、紀元後三六年まで下るかもしれない——紀元後六四年と六七年の間どこかで終わる。たいていの学者は、物語そのものは紀元後七〇年と九五年の間の或る時点で編纂されたか、転写されたと信じている。とすれば、大まかに言って、『使徒言行録』は、福音書の全部とはいわないまでも、若干のものと同時代だということになる。四福音書全部よりも早い時期かもしれない。いわゆる『ヨハネによる福音書』より前のものだということは、ほぼ確かである。少なくとも、そのテキストがわれわれに伝えられている本文の形態においてはそうである。

『使徒言行録』の著者は、自らをルカと称する高い教育を受けたギリシア人である。『コロサイの信徒への手紙』四：一四でパウロの親友として言及されている。「愛する医者ルカ」と同一人物であるか否かは、決定的には確認することはできない。もっとも、新約聖書学者たちは、彼が「愛する医者ルカ」であるということを受け入れようとしているのであるが。現代の学者たちはまた、彼が明らかに『ルカによる福音書』の著者と同一人物であることに同意している。実際、『使徒言行録』は時として『ルカによる福音書』の「後半部分」であると見なされている。どちらも、「テオフィラス」という名前の未知の受取人に宛てられている。どちらもギリシア語で書かれているので、多くの単語や名前がギリシア語に翻訳されていて、おそらく多くの場合には、ヘブライ語やアラム語の言語からはニュアンスにおいても意味においてさえも変えられているであろう。いずれにせよ、『使徒言行録』も『ルカによる福音書』もともに特にギリシア人の読者のために書かれたものである——クムラン文書が宛てられていた読者とは非常に違っている。

『使徒言行録』は、その物語の後半を独占するパウロに主として焦点を当ててはいるが、エルサレムの教会とパウロの関係についても物語っている。この教会は、「主の兄弟ヤコブ」の指導の下にあったイエスの直弟子から成るもので、後になってから「最初のキリスト教徒」と呼ばれるようになり、現代では「初代教会」あるいは「原始教会」と呼ばれている〈飛び地〉(エンクレイプ)ないしは〈派閥〉(ファクション)であった。しかしながら、『使徒言行録』は、この教会とパウロの関わりを物語るに際して、パウロの見解しか示していない。『使徒言行録』は本質的にパウロ的な——あるいは現在では「規範的」と思われている——キリスト教の文書なのである。言い換えれば、パウロは常に「ヒーロー」なのである。彼に反対する者は誰であれ、それが当局であれ、あるいはたとえヤコブであれ、自動的に悪人にされるのである。

『使徒言行録』は、イエス——彼は「ナゾレ人」(ギリシア語ではナゾライオン)と呼ばれている——が、舞台から姿を消した直後から始まっている。それから物語は、エルサレムにおける共同体、つまり「初代教会」の形成と発展の物語、およびそれが当局との葛藤をますます増大させていくという物語に進む。この教会は、『使徒言行録』二：四四—四六において、生き生きと描かれている。「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有し、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き……」。(ついでながら、彼らがこのように神殿に固着していたことは注目に値する。イエスと直弟子たちは普通神殿に敵対的であったと描かれている。福音書によれば、イエスは神殿で、両替人たちのテーブルをひっくりかえし、祭司たちからの激しい嫌悪を被った)。

『使徒言行録』六：八は、最初の正式な「キリスト教徒の殉教者」であるステファノという名の人物を紹介する。彼は逮捕され、石打ちによる死刑の宣告を受ける。ステファノは、自分を弁護しつつ、「義人」あるいは「正しい者」の来臨を預言した人々が殺されてきたことを引き合いに出す。この呼び名は、その性格において特にクムラン的でユニークである。「義人」は、『死海文書』では繰り返し「ザディク」(あるいは「ツァディク」(Zaddik)として登場する。巻物のなかの「義の教師」(モレー・ハ・ゼデク、Moreh ha Zedek)も同じ語源に由来する。そして歴史家ヨセフスが、メシア的で反ローマ的なユダヤ人の信奉者たちの指導者として、明らかに「サドゥク」あるいは「ザドク」という名前の教師に言及するとき、これもまた「義人」の間違ったギリシア語読みであるように思われる。とすれば、『使徒言行録』において描かれているステファノは、クムランにとってユニークな、そしてとりわけ特徴的な名称を用いているのである。

これは、ステファノの演説のなかに現れてくるクムラン的関心の唯一のものでもない。彼は、自分の弁明において、彼を迫害する者たちを次のように呼んでいる(『使徒言行録』七：五三)。「[あなたがたは]天使たちを通して律法を受けた者たちなのに、それを守りませんでした」と。『使徒言行録』が描くように、ステファノは明らかに律法に熱心に固着していた。ここにもまた、正統的な、通説となっている伝統との葛藤が見られる。後のキリスト教的伝統

によれば、律法を厳しく、そしてピューリタンの崇拝したのは、当時のユダヤ人たちであった。「初代のキリスト教徒たち」は、少なくともユダヤ人たちの厳しさという見地からすれば、慣習や慣行を軽蔑し、新しい自由と柔軟性を提唱していた<異端者(マヴェリック)たち>あるいは<反逆者(レネゲイド)たち>として描かれている。だが、最初の「キリスト教徒の殉教者」ステファノこそが、律法の唱道者として立ち現れているのである。他方、彼を迫害する者たちは、その怠慢を非難されているのだ。

自ら律法に固着する者と宣言するステファノが、その同じ律法を激賞する仲間のユダヤ人たちによって殺されるというのでは、話が合わない。だが、もしこれらの仲間のユダヤ人たちが、ローマ当局と協力するようになった祭司たちを代表していたとすれば、どうであろうか。もし彼らが実際——例えば、ドイツ軍の占領下にあった多くのフランス人たちのように——ただ「静かな生活」を望み、彼らのただなかに報復を惹き起こしかねない煽動者やレジスタンスの闘士を恐れていた、とすればどうであろうか。ステファノがそのメンバーであった「初代教会」は、絶えず自分たちの正統性と熱心な律法への固着を強調していた。この教会を迫害していた者たちは、ローマと仲睦まじくしようとしていた者たちであり、そうすることで、律法から外れ、あるいは、クムラン的用語を用いれば、律法に違反し、律法を裏切っていた者たちなのである。こういう文脈に置いてみれば、ステファノが彼らを非難したことも、彼らがステファノを殺したことも辻褃が合う。そして、後に述べるように、ヤコブ——彼は「義人」、「ザディク」つまり「義なる人」、「主の兄弟」と呼ばれ、律法への輝かしい固着を最もよく例証した人物である——が、後に、後代の伝承によれば、ステファノとまさに同じ運命を辿るのである。

『使徒言行録』によれば、パウロ——当時はタルソのサウロと呼ばれていた——が登場するのは、ステファノの死に際してであった。彼はステファノに対する迫害者たちが衣服を投げ捨てるのを側で見ていたと言われているが、もっと積極的な役割を果たしていたのかもしれない。『使徒言行録』八：一では、サウロが「ステファノの殺害にまったく賛成していた」と告げられている。そして後に『使徒言行録』九：二一では、パウロは、まさにステファノの死に極まった「初代教会」への一種の攻撃を行っていたと非難されている。確かにサウロは、彼の生涯のこの段階においては、「初代教会」に対する敵意ということにおいて、熱心であり、熱狂的でさえあった。『使徒言行録』八：三によれば、彼は「教会を全面的に破壊しようとして、家から家へと押し入り教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた」。当時、彼はもちろん、親ローマ的な祭司たちの寵児として振る舞っていたのである。

『使徒言行録』九章は、サウロの回心を物語っている。ステファノの死後すぐに彼はダマスкасへ向かう。そこの「初代教会」のメンバーたちを捜し出すためであった。彼は襲撃隊に伴われていたし、彼の主人である大祭司からの逮捕状を持っていた。すでに見てきたように、彼のこの遠征は、おそらくシリアへのものではなく、『ダマスкас文書』のなかに現れるダマスкасへのものであったであろう。

彼の遠征の途上、サウロは、何か精神的な外傷として残るような経験をする。それについての注釈者たちの解釈は、日射病から、癲癇の発作、神秘的啓示に至るまで様々である(『使徒言行録』九：一一一―九、二二：六一―六)。「天からの光」が彼を襲い、彼を馬から落ちさせ、どこから来るとも分からない「声」が、彼に要求する。「サウロよ、サウロよ、なぜ私を迫害するのか」。サウロは、その声が誰のものか尋ねる。「あなたが迫害している私は、ナゾレ人イエスである」とその声は答える。その声はさらに彼にダマスкасへ行くように指示を与え、そこで彼が次に何をなすべきかを知るであろうと告げる。この「顕現(ヴィジティション)」が過ぎ、サウロが以前の意識を取り戻したとき、彼は一時的に盲目になっていたのに気付く。ダマスкасで「初代教会」の一メンバーによって彼の視力は、回復させられ、彼は洗礼を受ける。

現代の心理学者ならば、サウロの経験について何も特別に異常なものを見出さないであろう。それは実際日射病や癲癇の発作によって惹き起こされたのかもしれない。同様に、幻想やヒステリーあるいは精神病的反応や、ひょっとしたら手を血で汚していた感受性の強い人

間の良心の痛みにも帰せられうる。しかしながらパウロは、これを、彼が個人的にはけっして知ることのなかったイエスの真の顕現だと解釈する。そしてこれが彼の回心を惹き起こす。彼は自分の以前の名前を捨てて、「パウロ」という名前を選ぶ。そして彼は後に、それ以前に「初代教会」を根絶させようとしていたのと同じような熱心さをもって、今やその「初代教会」の教えを広めるのに熱中する。彼は、この教会に参加し、その見習い、ないし弟子の一人になる。彼の『ガラテヤの信徒への手紙』によれば、彼は三年の間、彼らの指導を受け、その時間の多くをダマスカスで過ごす。『死海文書』によれば、クムラン共同体への新参者のための見習いおよび訓練期間も三年間であった。

パウロは、三年間の見習い期間の後に、エルサレムに戻り、そこの「共同体」の指導者たちと一緒になろうとした。当然ながら、彼らのうちの多くの者は、彼の回心を完全には信じられず、彼を疑っていた。『ガラテヤの信徒への手紙』一：一八一―二〇では、彼はヤコブとケパにだけ会ったと述べている。使徒たちも含む他の誰も、彼を避けていたようである。彼は繰り返し自分を証明するほかなく、そうすることによってだけ若干の味方を得られたのであり、説教を始めることもできた。しかしながら議論は続き、『使徒言行録』九：二九によれば、エルサレム教会の或るメンバーたちは、彼を脅かした。醜い状況が起こるのを避ける手段として、彼の味方たちは、彼を、生まれ故郷であるタルソ(現代ではトルコにある)へ急いで送り出した。彼は故郷に送られて、実際そこでメッセージを広め始めた。

これは追放に等しかったのだということを理解することが大事である。エルサレムの教会は、クムランの共同体がそうであったように、パレスティナの諸事件にほとんど完全に忙殺されていた。ローマのような外の広い世界に関心があったのは、その世界が、彼らのもっと身近な現実に影響を与えたり、侵害してきたかぎりにおいてであった。それゆえ、パウロをタルソへ急いで送り出したことは、暫定的なIRAのゴッドファーザーが、新入りの、良い訓練を受けていない、そして過剰に精力的な新兵を、「輝く道(シャイニング・パス)」の間で支持を集めるためにペルーに送り出すことになぞらえられるかもしれない。もし彼が、ありそうもない僥倖(ぎょうこう)によって、どうにかして人や金や資材や、あるいは何か価値のあるものを引き出すことができたなら、それはそれで結構である。もし彼がその代わりに腹を切り裂かれるようなことになっても、過剰に惜しまれることもない。どうせ彼は、利益になるよりむしろ邪魔だったからである。

そのようにして(『使徒言行録』によれば)パウロの外国への三つの〈単独出撃(ソーティーズ)〉の最初のもので生じてきたのである。彼はその出撃では、所もあろうにアンテオケに行く。そして、『使徒言行録』一一：二六から知られるように、「弟子たちが初めて〈クリスチャン〉と呼ばれたのは、アンテオケであった」のである。注釈者たちは、アンテオケへのパウロの旅を、ほぼ紀元後四三年のこととしている。その頃までには、その地で「初代教会」の一つの共同体が形成されていて、ヤコブの下にあるエルサレムのその宗派の指導部に報告を送り返していたのである。

それから約四―五年後、パウロの伝道の仕事の内容に関する議論が起こったとき、彼はアンテオケで教えていた。『使徒言行録』一五章が説明するように、エルサレムの指導部の或る代表者たちが、アンテオケに到着する。おそらくパウロの活動について調べるといふ特別の目的を持っていたのであろう、とアイゼンマンは提案する。彼らは、律法に厳格に固着することの重要性を力説し、怠慢であるとしてパウロを非難する。パウロと彼の同僚であるバルナバは、直ちにエルサレムに戻り、その指導部と個人的に相談するように命令させる。この時点から、パウロとヤコブとの間の分裂が始まり、それが広がっていく。そして『使徒言行録』の著者は、この論争に関するかぎり、パウロの弁護者になる。

後に続くあらゆる浮沈のなかで、強調されなければならないのは、パウロが事実上最初の「キリスト教的」異端者であるということ、そして彼の教えが――それは後のキリスト教の基礎になるのだが――[エルサレム教会の]指導部によって激賞されていた「本来の」そして「純粋な」形態からの甚だけしからぬ逸脱であったということである。「主の兄弟」ヤコブが、文字通

りイエスの親族であったにせよそうでなかったにせよ(万事は親族であったことを暗示しているのだが)、彼がイエスを——あるいは後にイエスとして記憶された人物を——個人的に知っていたことは明らかである。エルサレムの共同体、つまり「初代教会」のメンバーのほとんども——もちろんペトロも含めて——そうであった。彼らが語ったとき、彼らは直接的権威(ファースト・ハンド)をもって語った。パウロは、自分が自らの「救い主」と見なし始めた人物をそのように個人的にはけって知らなかった。彼はただ砂漠で半ば神秘的な経験をし、身体を持たない声を聞いたただけであった。このことに基づいて自分に権威があるのだと称することは、控え目に言っても、思い上がったことであった。この経験に導かれて彼は、イエスの教えを、本来のものと見分けがつかないほどに歪曲してしまう——つまり彼は事実、彼自身のきわめて個人的な、そして独特な(特異体質的な・イディオシンクラティック)神学を形成するのであり、そしてそれを偽ってイエスに由来すると称して合法化するのである。厳密にユダヤの律法に固着していたイエスにとっては、彼自身を含めて、およそ死ぬべき人間を礼拝することを提唱するなどとは最も極端な冒瀆であったであろう。イエスは、福音書においてこのことを明らかにしている。彼は、自分の弟子たち、自分に従ってくる者たち、聴衆に、神のみを認めるように強く勧めていた。例えば、『ヨハネによる福音書』一〇：三三―三五において、イエスは自分が神であると主張しているとの廉で非難されている。彼は『詩篇』八二を引用しながら答える。「あなたたちの律法に〈わたし(『詩篇』のなかの神の意)は言う。あなたたちは神々である〉と書いてあるではないか。神の言葉を受けた人たちが〈神々〉とされている」と。

パウロは実際、神を脇に押し退けて、初めて、イエスを礼拝することを創唱した——イエスは、アドニス、タンムズ、アッティス、その他の当時中東に住んでいた〈死んで甦る〉神々と一種同等な存在になるのである。これらのライヴァルの神々と競うために、イエスは、あらゆる点において一つ一つ、またすべての奇跡においても逐一、彼らと競合しなければならなかった。多くの奇跡的要素がイエスの伝記と結び付けられていったのは——十中八九、いわゆる処女降誕や死人のなかからの復活をも含めて——この段階のことであったであろう。それらは本質的にパウロの発明であって、エルサレム教会のヤコブや他の者たちによって広められていた「純粋な」教義とはしばしばひどく食い違うものであった。それゆえ、ヤコブや彼の側近たちが、パウロのやっていることに当惑させられたことは、ほとんど驚くに値しない。

だがパウロは、自分のやっていることを十分承知していた。彼は、驚くほど現代的な識見(sophistication)をもって、宗教的プロパガンダの技術を理解している。彼は、一人の男を神に仕立てあげるために何が必要かを理解しており、ローマ人が彼らの皇帝について成した場合よりもっと抜け目なく立ち回る。自らははっきりと認めるように、パウロは、史的イエス——ヤコブやペトロやシメオンが個人的に知っていた人物——を伝えるような振りをしない。逆に彼は、『コリントの信徒への手紙二』一一：三―四にあるように、エルサレム教会が「異ったイエス」を宣べ伝えていると認めている。彼らの代表者たちは、自らを「義の僕(しもべ)」と呼んでいる、と彼は言う。この「義の僕」とは、特徴的なクムランの用語なのである。彼らは今や、あらゆる点で、パウロの敵手なのである。

パウロは、彼に与えられた指示に従って、アンテオケからエルサレムに戻り——それは一般に紀元後四八―四九年頃と信じられている——そこの教会の指導部と会う。当然ながら、また論争が起こる。もし『使徒言行録』が信じられるとすれば、ヤコブは、平和のために、妥協に同意する。それによって「異教徒たち」は集会に参加しやすくなった。ありそうもないことだが、ヤコブは、律法の一定の面を緩和させるのに同意する——他の面については厳格であり続けるのだが。

パウロは指導部に対して口先だけで敬意を表す。この時点では彼はまだ彼らの是認を必要としている——彼の教えを正当なものとしてもらい、彼が外国で設立した諸教会の存続を保証してもらうためである。しかし彼はすでに、「わが道を行く」決意をしている。彼は次の伝道旅行に出掛け、エルサレムへの再度の訪問によって中断されはするが(『使徒言行録』一

八：二一)説教を続ける。彼の手紙のほとんどは、紀元後五〇―五八年のこの時期のものである。彼の手紙から明らかなることであるが、彼は、この頃までには、エルサレムの指導部からも、また律法への固着からもほとんど完全に離れてしまうようになる。彼の『ガラテヤの信徒への手紙』(紀元後五七年頃)において、彼は、「おもだった人々」のことを辛辣に当て擦っている。「わたしは、おもだった人たちからも強制されませんでした。——この人たちがそもそもどんな人であったにせよ、それは、わたしにはどうでもよいことです」(『ガラテヤの信徒への手紙』二：六)と。彼の神学的立場も、律法に厳しく忠実である人々から回復不可能なまでに離反していった。彼は同じ書簡のなかで(二：一六)言っている。「人は律法の実践によってではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる……律法の実行によっては、誰一人として義とされないからです」と。これらの言葉は、自ら宣言した背教者の挑発的で挑戦的な宣言である。後にパウロから進化していったような「キリスト教」は、この頃までには実質上その根との関係を絶ってしまい、何かイエスと関係があるものとはもはや言えず、ただイエスについてのパウロのイメージとだけ関係するようになったのである。

紀元後五八年までには、パウロは再度エルサレムに戻っている——彼の支持者たちからの戻るなという訴えにもかかわらずである。支持者たちは、明らかに上層部との争いを恐れていて、パウロに行かないように懇願したのである。パウロは再度ヤコブおよびエルサレム教会の指導者たちと会う。彼らは、今ではもう御馴染みのクムラン的用語をもって、他の「律法に熱心な者たち(ゼーロータイ)」と共有している憂慮の念を表明する——つまり、パウロが、外国に住んでいるユダヤ人たちに説教する際に、モーセの律法を破棄するように勧めているということへの憂慮である。そこから受ける印象では、パウロは嘘を言い、偽証をし、彼に対する告発を否定しているようである。七日間身を潔めるようにと要求され——それは告発の不正と、律法への彼の変わらぬ忠誠を示すためであった——彼は直ちにそうするように同意する。

しかしながら、その数日後、彼はまた、ヤコブほど寛容ではない「律法に熱心な者たち」と衝突する。彼は、神殿にいるのを見られ、一群の敬虔な者たちに襲われる。彼らは激怒して主張する。「この男は、民と律法とこの場所を無視することを、至るところで誰にでも教えている」(『使徒言行録』二一：二八以下)。暴動が起こり、パウロは神殿から引き摺り出され、彼の命が危険に晒される。彼は折りよく、この騒動のことを聞いたローマの将校によって救出される。その将校は一群の兵士たちを伴っていた。パウロは逮捕され鎖を掛けられる——明らかに最初は、パウロがスィーカリ派の指導者、ゼロテ党のテロリストの幹部だという想定である。

この点で物語は、ますます混乱する。そしてわれわれは、その一部が変えられたか削除されたか疑うほかない。現在のテキストによれば、パウロは、ローマ軍が彼を運び去る前に、自分がタルソのユダヤ人であると抗議し、たった今彼をリンチにかけようとしていた群衆に話をするのを許可してくれるように頼む。奇妙なことに、ローマ人たちは彼がそうするのを許可する。そこでパウロは、自分がガマリエル(当時の有名な教師)の下でファリサイ派の訓練を受けたことについて、彼が最初は「初代教会」に対して敵対的であったことについて、ステファノの死に際しての彼の役割について、その後の彼の回心について長々と話す。これらすべてが——あるいはひょっとしたらその一部だけが(どちらかは確認できないが)——群衆を新たな怒りに駆り立てる。彼らは叫ぶ。「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしてはおけない」(『使徒言行録』二二：二二)と。

ローマ人たちは、これらの訴えを無視して、パウロを「砦」に運んでいく——おそらくローマの軍事的・行政的司令部であったアントニアの砦であろう。ここで彼らは、パウロに拷問を加えて取り調べをしようとする。何のために彼を取り調べるのか。『使徒言行録』によれば、なぜ彼が群衆にあのような敵意を掻き立てたのかを決定するためである。だがパウロはすでに公然と彼の立場を明らかにしていた——もっとも、彼の演説のなかに、テキストによっては明らかにされないような仕方、ローマ人たちに彼が危険で反乱的であると思わせたよう

な要素があったのであれば別であるが。いずれにせよ、ローマ法によれば、十分な、そして正式なローマ市民権を持っているいかなる者に対しても、拷問は執行できなかった。そしてパウロは好都合なことに、タルソの裕福な家の生まれで、それを持っていた。その免除を懇願することによって彼は、拷問を免れる。だが彼は監禁されたままだった。

その間に、四十人から五十人の激怒したユダヤ人の一団が、密かに会合する。彼らは、パウロを殺すまでは飲食をしないと誓う。この敵意の激しさ、凄まじさそのものは、注目に値する。「通常の」ファリサイ派やサドカイ派からは、そのような暴力への決意はいうに及ばず、そのような敵意は予期できない。そのような敵意を燃やす者たちは、明らかに「律法に熱心な者たち(ゼーロータイ)」である。だが、当時のパレスティナにおいて、律法に対してそのような情熱的な忠誠心を持っていた者たちは、後にクムランで発見された聖なるテクストを残した者たちだけであった。そういうわけで例えば、アイゼンマンが注意を喚起している『ダマスカス文書』の重要な一節では、次のように宣言されているのである。「人が、全身全霊をもってモーセの律法に立ち返ることを誓った後で、違反を犯すならば、彼に報いが加えられなければならない」と。

パウロに対して計画されたような暴力的行動は、〈合意〉によって表明されたような、温和で禁欲的で静寂主義的なエッセネ派という通俗的なイメージと、いかにして和解させられるであろうか。パウロを除去しようという秘密投票や熱烈な誓い——こういうものは、戦闘的なゼロテ党、および彼らの特別な暗殺集団、恐れられていたスィーカリ派の特徴により近い。ここにおいても再度、一方においてはゼロテ党、他方においてはクムランの「律法に熱心な者たち」が、同一の者たちであったという考えが執拗に起こってくる。

彼らが誰であったにせよ、『使徒言行録』によれば、自称暗殺集団は、これまで触れられていなかったパウロの甥の突然の、そして折り良い出現によってその実行を妨げられた。この甥は、どのようにしてか、彼らの計画を知ったのである。この親戚——われわれは彼についてはこれ以上何も知り得ないのだが——は、パウロにもローマ人たちにも情報を流す。その夜、パウロは、彼自身の安全のために、エルサレムから連れ出される。彼は、四七〇人の兵士たちに護衛されて連れて行かれる——二人の百人隊長の命令下の二百人の歩兵と二百人の槍部隊と七十人の騎兵である！ 彼は、ユダヤにおけるローマの首都カエサレアに連れて行かれ、そこで総督とローマの傀儡王アグリッパの前に現われる。だがパウロは、ローマ市民として、彼の事件をローマで取り調べてもらう権利を持っていた。そして彼は、この権利を行使する。その結果彼は、裁判のためにローマへ送られる。何のために彼が裁判にかけられるのかについては、何の指摘もない。

『使徒言行録』は、彼の旅行途上の冒険——難破も含めて——を物語った後で終わる。というよりはむしろ、その著者が仕事を中断させられたかのように、あるいは元来の結びの部分が除去され、その代わりにお座なり終末部分が挿入されたかのように、突然とぎれる。もちろん後には無数の伝承が生まれた——パウロは投獄されたとか、皇帝が個人的に彼の話を聞いたとか、釈放されてスペインへ行ったとか、ネロが彼の処刑を命令したとか、彼がローマで(あるいはローマの牢獄で)ペトロに会ったとか、彼とペトロとが一緒に処刑されたとか、である。しかし、『使徒言行録』にも、また信頼できる他のいかなる文書にも、これらの伝承を基礎付けるものは何もない。おそらく『使徒言行録』の元来の結びは実際に削除されるか変更されるかしたのであろう。ひょっとしたら著者のルカは、端的に「次に何が起こったのか」を知っておらず、そして美的平衡感覚などに無関心で、単に中途半端な終わり方をしたのかもしれない。あるいはひょっとすると——アイゼンマンが暗示するように——そしてこの可能性については後に検討するが——ルカは知っていたのだが、その知識を隠蔽するために、意図的に叙述を打ち切った(あるいは後代の編集者によって短縮された)のかもしれない。

『使徒言行録』の最後の部分——神殿で起こった暴動から後の部分——は、ゴタゴタし混乱し、答えられない疑問だらけで謎に満ちている。だが『使徒言行録』の他の箇所は明らかにきわめて単純である。一方においては、パウロの回心とそれに続く冒険についての物語が

ある。だがこの物語の背後には、エルサレムの原初の共同体、つまり「初代教会」内部の二つの分派間のますます増大する争いについての年代記が潜んでいる。これらの分派の一方は「鷹派(ハードライナー)」から成っており、彼らはクムラン文書の教えに呼応するもので、律法を厳格に遵守することを主張している。他方は、パウロと彼の直接の支持者たちによって代表されていて、律法を緩和させようとしているし、人々が教会に参加しやすいようにすることによって、新しい参加者の数を増やそうとしている。「鷹派」は、数よりも教義的な純粋さにより大きな関心を寄せており、パレスティナの外での事件や展開にはお座なりの関心しか持っていないし、ローマとの和解への願望など一切示していない。他方パウロは、教義的純粋さをなして済まそうとしている。彼の主たる目的は、彼のメッセージを出来るだけ広く伝播させ、可能なかぎり多数の信奉者たちを集めることであった。彼は、この目的を達成するために、当局にわざわざ敵対することを避けようとするし、ローマと調停したり、ローマのご機嫌を伺ったりすることさえまったく辞さない。

とすれば、『使徒言行録』に見られる「初代教会」は、生まれつつあった分裂によって引き裂かれていたが、その分裂の煽動者はパウロである。パウロの主たる敵手は、「主の兄弟」ヤコブという謎に満ちた人物である。ヤコブが、後代の伝承において「初代教会」として知られるようになるエルサレムの共同体の承認された指導者であったことは明らかである。たいていの場合ヤコブは、「鷹派」として登場しているが——もし『使徒言行録』が信用できるならば——一定の点については妥協する用意があることを示している。しかしながら、すべての証拠が暗示するところによれば、この最も穏健な柔軟性ですら、そのことに対する『使徒言行録』の著者の側での何ほどかの承認を反映している。明らかにヤコブを、この物語から削除することはできなかったであろう——彼の役割は、案じるどころ、あまりにも良く知られていたものであった。結果として彼は、幾分格下げされて、調停的な人物として——パウロと極端な「鷹派」のどこか中間に位置する人物として——描かれるほかなかった。

いずれにせよ『使徒言行録』の「下書き(サブ・テキスト)」は、ヤコブとパウロという二人の強力な人物の間の衝突に還元される。アイゼンマンは、ヤコブが元来の一連の教えの番人、教義的純粋さと律法への厳格な忠誠心の代弁者として現われていることを例証した。「新しい宗教」を創設するなどということは、およそ彼が考えもしなかったことであろう。だがパウロのしていたことは、まさに「新しい宗教」の創設であった。パウロのイエスは、完璧な神であり、その伝記は、奇跡の一つ一つに至るまで、パウロが信者獲得で競っていたライヴァルの神々のものにマッチしていた——結局のところ、神々も、石鱈やペット・フードが売られるのと同じ市場原理に基づいて売られるのである。ヤコブの基準に従えば——そして実にどんな敬虔なユダヤ人の基準に従っても——こういうことはもちろん冒瀆であり背教であった。このような問題が惹き起こす情熱を考えると、ヤコブとパウロの間の分裂は、『使徒言行録』が暗示しているような具合に、品位ある討論のレベルなどに限られることはほとんどありえなかったであろう。それは、この物語の終わりに表面化されたような殺人をも辞さない敵意を生み出したことであろう。

ヤコブとパウロの間の争いにおいて、われわれがキリスト教と呼ぶものの誕生と進化は、一つの分かれ道に立っていたのである。もしその発展の主流が、ヤコブの教えに添ったものとなっていたならば、キリスト教など全然存在しないことになったであろうし、それはユダヤ教の一つの特別の分派に留まったであろう。それは優勢なものになったかもしれないし、ならなかったかもしれない。だが、実際に起こったことは、新しい運動の主流は、次の三世紀の間に、パウロと彼の教えを中心に次第に合同していったのである。このようにして、ヤコブと彼の仲間の死後、疑いもなく恐ろしいことには、実にまったく新しい宗教が生まれたのである——つまり、その創始者と目される者[イエス]とは、ますます関係ないものになっていった宗教がである。(以上。第12章『使徒言行録』 [全文抜粋](#))

死海文書の謎

マイケル・ベイジェント／リチャード・リー 共著
高尾利数 訳

第16章 パウロ＝ローマのスパイあるいは密告者？

こうした壮大なデザインを心に留めながら、『使徒言行録』の終わり近くで起こる諸事件に関する混乱した、そしてスケッチ風の描写を再度眺めてみるのは、価値のあることだと思う。記憶されているであろうが、パウロは、外国での長い福音伝道の後に、ヤコブや怒れる指導部によって再度エルサレムに召喚される。彼の身近の支持者たちは、紛争を予感して、彼の旅程のそれぞれの場面で繰り返し、行かないように勧告する。だが、パウロは、対決を恐れるような人物ではなく、彼らの訴えに耳を貸さない。ヤコブや教団の指導者たちと会ったとき、彼はまた、律法の遵守において弛緩しているとのかどで酷評される。『使徒言行録』は、こういう告発に対するパウロの応答を記録していないが、この後に続く物語からすると、彼は自分に対する非難を否定し、偽証しているように思われる。そしてそれは、彼自身の手紙が正当化されたものであることを漏らしている。言い換えれば、彼は自分の攻撃の重大性を認識しているのである。そして彼の誠実さがどれほど確固たるものであれ、またイエスについての「彼の」把え方(ヴァージョン)がどれほど熱狂的なものであれ、今度は何らかの妥協が必要であることを認めるのである。そういうわけで、七日の間身を潔めて、彼に対する告発の不正を証明するように要求されたとき、彼は直ちにそうすることに同意するのだ。ヤコブは本当の状況に気が付いていたかもしれないし、パウロはうまく「仕組まれていた」のかもしれない、とアイゼンマンは暗示する。彼が潔めの儀式を拒否していたら、彼は、公然と律法に違反する者と宣言されていたかもしれない。儀式に同意することによって、彼は、以前にもまして、『ハバクク書注解』のいう「偽り者」になったのである。彼は、どのようなコースの行動を選んだにせよ、自分を断罪したことになるであろう——それはまさしくヤコブが意図していたことかもしれない。

そして無罪を証明しようとする彼の自己浄化の努力にもかかわらず、いずれにせよパウロは、「律法への熱情」を持つ者たちの間に敵意を喚起し続ける——彼らは数日後に神殿で彼を襲撃するのである。彼らは宣言する。「この男は、至るところで、あらゆる人に、……律法を無視するように説教している」(『使徒言行録』二一：二八)と。続いて起こった暴動は、けっして小さな騒動というようなものではなかった。

それで、都(みやこ)全体は大騒ぎになり、民衆は駆け寄って来て、パウロを捕え、境内から引き摺り出した。そして、門はどれもすぐに閉ざされた。エルサレム中が混乱状態に陥っているという報告が届かなかったならば、彼らはパウロを殺していたであろう(『使徒言行録』二一：三〇—三一)。

歩兵隊が呼び出される——それも六百名を下らない数——そしてパウロは、間髪のところ救出される。おそらくもっと大規模の市民の暴動を防ぐためであった。他のどんな理由のために歩兵部隊が出動するであろうか。自分の仲間の怒りを呼び起こした一人の異端的ユダヤ人の命を救うためだけ、などということがあるだろうか。この暴動の規模そのものが、いわゆる「初代教会」が当時のエルサレムで——ユダヤ人の間で——行使することのできた人気、影響、力がどのようなものであったかを証明している！ われわれが取り扱っているのは明らかに、ユダヤ教自体の内部の運動——しかもその町の市民の多くの忠誠を勝ち取ることができたような運動——なのである。

激昂した群衆からパウロを救出した後、なぜかローマ軍は彼を逮捕する。そして彼は、牢屋へ送られる前に、自分の無実を証明するための演説をすることを許してくれと頼む。説明できないことだが、なぜかローマ軍は彼の要望を認める。もっとも、彼の演説は暴徒をますます激昂させるのに役立っただけであったが。それからパウロは、拷問と尋問のために連れ去られる。以前にも問うたことだが、何についての尋問であろうか。正統性とか儀式の遵守とかという微妙な点に関して仲間の信者たちを怒らせた男を、なぜ拷問にかけ尋問するのであるだろうか。ローマ軍があればほどの関心を示したことに対する唯一の説明は、パウロが政治的および(あるいは)軍事的性格の事情に通じているのではないかという疑惑をかけられたことである。

ローマ軍に対決していた唯一の重大な政治的および(あるいは)軍事的敵手は、ナショナリスティックな運動の信奉者たち——通俗的伝統にいう「ゼロテ党」——だけであった。そして「初代教会」の伝道者であったパウロは、それらの「律法への情熱を持つ」者たちから脅迫されていた——彼らは、三十人から四十人にもおよぶ数の者たちで、彼を殺そうと企てていて、そうするまでは飲み食いをしないと誓っていたのである。パウロは、これまでまったく言及されてこなかった甥によって、この窮状から救い出され、護衛付きで、エルサレムからカエサリアへと送られるが、そこでローマ市民としての権利を引き合いに出して、皇帝に個人的に訴えると言い出す。彼は、カエサリアにいる間に、ローマの総督フェリクスと、打ち解けた親しげな様子で付き合う。アイゼンマンは、パウロが、総督の義兄弟のヘロデ・アグリッパ二世とも、そしてその王の姉妹とも親しくしていたことを強調する。彼女はのちにティトウスの妾になるのであるが、ティトウスは、のちにエルサレムを破壊し、遂には皇帝になるローマ軍司令官であった。

パウロの伝記の背景に漂っている疑わしい要素はこれだけではない。そもそもの初めから、明白に彼が富んでいたこと、彼がローマ市民権を持っていたこと、現存する支配体制と彼が容易に親しくなれたこと——こういうことが、彼の仲間や、「初代教会」の他のメンバーたちとは違っていたのである。明らかに彼は、支配的なエリートたちと強力な関係を持っていた。彼のように若い男が、それ以外の理由で、どうして大祭司の手先になれたであろうか。さらに彼は、『ローマの信徒への手紙』(一六：一一)のなかで、驚いたことに「ヘロディアン」という彼の同胞に言及している——それは明らかに当時統治していた王朝と関係のある名前であり、仲間の伝道者な

どではまずありえない。『使徒言行録』一三：一は、アンテオキアのパウロの同僚で「領主ヘロデと一緒に育ったマナエン」に言及している。ここにもまた、彼が上流階級と貴族的親密さを保っていたことの証拠がある。

こうした暗示がどれほど衝撃的なものであろうとも、パウロが何らかの種類のローマの「諜報員(エイジェント)」であったということは、少なくとも可能であったように思われる。アイゼンマンは、巻物自体によってこの結論に導かれたのであり、それから、それを支える言及を新約聖書のなかに見出したのである。そして実際、クムランで発見された資料を、『使徒言行録』のなかの資料と、そしてパウロの手紙のなかの不明瞭な言及とを、結合させ重ね合わせてみると、そのような結論が明瞭な可能性となるのである。だが、おそらくそれに劣らず驚くべきあるもう一つの可能性もある。エルサレムにおける最後の混乱した、謎に満ちた諸事件、間一髪のローマ軍の介入、エルサレムからの大規模な護衛付きのパウロの脱出、カエサリアでの彼の贅沢な滞在、歴史の舞台からの神秘に満ちた、そして完全な消滅——これらは、われわれ自身の時代に奇妙な呼応を見出すのである。われわれは、合衆国における「証言保護綱領」(Witness Protection Program)の受益者たちを思い出す。われわれはまた、北アイルランドのいわゆる「スーパーグラス現象」を思い出す。どちらの場合にも、組織化された犯罪あるいは正規軍に準じるテロリズムのために捧げられた不法の組織のメンバーが、当局によって「転向(ターン)」させられる。彼は、免除、保護、再配置、金と交換に、証拠を提供し証言する。その者は、パウロのように、自分の仲間の激怒を招き復讐を受ける。彼は、パウロのように、明らかに不釣り合いな軍事的保護および(あるいは)警察の保護の下に置かれる。彼は、パウロのように、護衛つきで連れ出される。当局に協力したので、彼は「新しいアイデンティティ」[新しい身分保証]を与えられ、自分の家族ともども理論的にみて彼に復讐しようとする仲間の手が届かないどこかに落ち着かせて貰う。世間全体との関わりということになれば、彼はパウロのように、蒸発してしまう。

とすれば、パウロは歴史に見られる「秘密諜報員」の仲間属しているのであろうか。歴史に見られる密告者や「スーパーグラス」の仲間なのであろうか。これらは、ロバート・アイゼンマンの研究によって生じてきた幾つかの疑問である。いずれにせよ、パウロの登場は、一連の運動を生じさせ、それらは逆転できないものとなった。当時のユダヤ教の枠内にあったローカルな運動として始まり、聖地を越えて影響を及ぼすようなものではなかったものが、当時誰も予見することなどできなかったような規模と比重を持つものへと変容していった。「初代教会」やクムラン共同体に託された運動は、事実上横取り(ハイジャック)され、その創始者たちをもはやかかえ込むことができないような何物かに変容させられてしまった。そして、最初は異端的であった思想の繻(もつ)れが生じ、それが続く二世紀の経過のなかで、まったく新しい宗教へと進化してしまうことになった。ユダヤ教の枠内で異端であったものが、今やキリスト教という正統になったのである。これほどの遠大な結果を生み出した歴史上の偶発事件は、他にはほとんどありえない。

(以上。第 16 章『パウロ＝ローマのスパイあるいは密告者?』 **全文抜粋**)

イエス・キリストの正体

気の触れたイエスの実像

[2013・11・18](#)

[ヨセフス](#)著「ユダヤ戦記」 6巻 301～302

「しかし、これらの兆しよりももっと恐ろしかったのは次のものだった。戦争が起こる四年前(六二年の秋)、都が平和と繁栄をとくに謳歌していたときのことである。

アナニアスの子イエスと呼ばれるどこにでもいる田舎者が祭にやってくるとこの祭では神のために仮庵をつくるのが全ユダヤ人の慣習だった—神殿の中で、突然、大声で、「東からの声、西からの声、四つの風からの声！ エルサレムと聖所を告発する声、花婿と花嫁を告発する声、すべての民を告発する声！」と叫びはじめた。

そしてイエスは日夜こう叫びながら、路地という路地を歩いてまわった。市民の中のその名の知られた者たちは、これらの不吉な言葉に苛立ち、この者を捕まえると何度も鞭打って懲らしめた。しかしイエスは自分のために弁解するわけでもなく、また自分を鞭打った者たちに密かに解き明かすわけでもなく、それまでと同じように大きな叫び声を上げつづけた。

そこで指導者たちは、事実そうだったのだが、ダイモニオン(擬人化された悪霊)か何かに憑かれていると考えて、イエスをローマ総督のもとへ引き出した。彼はそこで骨の髄まで鞭打たれたが、憐れみを乞うわけでも涙を流すわけでもなく、ただひどく悲しみに打ち震える調子で、鞭打たれるたびに、「エルサレムに呪いを！」と言った。

アルピノスが「彼は総督だった(アルピノスは六二—六四年まで総督)—「いったいおまえは何者で、どこからやって来たのだ。何のためにこんなことを口にするのか」と尋問しても、それには答えず、都を呪う言葉を繰り返すだけだった。結局アルピノスは、気が触れていると宣告して男を放免した。

以後この男は戦争の勃発まで、市民に接触することはなく、また話しているのを目撃されることもなく、毎日祈りでも唱えるかのように、「エルサレムに呪いを！」と悲しみの言葉を繰り返していた。イエスは連日自分を鞭打つ者を呪いもせず、また食べ物を恵んでくれる者を祝福もしなかった。男はすべての人にあの薄気味悪い呪いの言葉を口にするだけだった。

とくに祭ともなれば、一段と声を張り上げて叫んだ。こうしてイエスは七年と五か月、相変わらずの調子で、倦むことなく嘆きの声を上げつづけた。

しかし、都が包圍されて呪いの言葉が成就されたのを見ると安息を得た。というのも、そのときイエスは周囲を巡回しながら城壁から「都と民と聖所に再び呪いを！」と甲高い声を上げていたが、最後に「そしてわたしにも呪いを！」と口にしたとき、投石機から発射された石弾が命中して即死したからである。こうしてイエスは、呪いの言葉をまだ口の端にのせながら、その命を解き放ったのである。」

上記ヨセフスの一文には、至る所に「共観福音書」に記載されている主テーマが秘匿されている。

1. 上記一文の全体像は「身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである」(マルコによる福音書 3:21 に符号)。
特に重要なのは下記箇所である。
2. 「エルサレムと聖所を告発する声、花婿と花嫁を告発する声、すべての民を告発する声！」(洗礼者ヨハネがヘロデ・アンティパスの結婚を告発した事等他。マタイによる福音書 14:1-13 に符号)
3. 「いったいおまえは何者で、どこからやって来たのだ。何のためにこんなことを口にするのか」(権威の論争 マルコによる福音書 11:27-33 に符号)
4. 「最後に「そしてわたしにも呪いを！」と口にしたとき、投石機から発射された石弾が命中して即死したからである」(イエスは磔刑ではなく、石打の責め苦で殺されたのだ。これは私(新村)の確信)
5. 「こうしてイエスは、呪いの言葉をまだ口の端にのせながら、その命を解き放ったのである」(「主よ、主よ。なんで私を見捨てるのですか」 マルコによる福音書 15:34 に符号)

- 蓋し、上記「気の触れたイエスの実像」を、実在の「洗礼者ヨハネ」に投写し、「洗礼者ヨハネ」の上に、この「気の触れたイエスの実像」を「塗油」して、背教徒パウロがペテロとマルコをたぶらかし、イエス・キリスト教なるエセ宗教を立教したのである。「洗礼者ヨハネ」が開教したキリスト教を背教徒パウロが乗っ取った様なのだ。前回、聖書の正体『燐・han』IIIで、「気の触れたイエスの実像」を紹介しましたが、この(上記の)イエスしか「共観福音書」に符合するイエスは存在しない。

正しくは、「気の触れたイエスの実在」=「本物のイエス」=「洗礼者ヨハネ」である。

註 尚、聖書の正体『燐・han』IVもご併読下さい。本稿については追って論攷。

根絶

六大差別

宗教・人種・文明・制度・職業・貧富

日本義塾 主宰 新村紘宇二